

埴町ふるさと産業おこし連絡協議会（福島県埴町）

町の花「ダリア」 を中心とした町づくり

埴町ふるさと産業おこし
連絡協議会 幹事
(埴町まち振興課長)

あまめま けいこ
天沼 恵子



1. 埴町の概要

埴町は、東北の玄関口、福島県の南端に位置する、人口1万人弱の町です。東は阿武隈山系、西は八溝山系に囲まれ、町の中央を1級河川久慈川が流れています。町の約8割が林野面積で、農業と林業を主幹産業とし、200mから700mの標高差を利用した花きや野菜栽培が特徴です。

気候は、東北地方でありながら温暖で、雪は少なく過ごしやすく、町の中央に位置する風呂山公園には、樹齢100年を誇る4,000株の山ツツジがあります。

古くから湧き出ているとされる湯岐温泉は、単純アルカリ性で神経痛、リウマチ、婦人病の効能があり、首都圏から多くの観光客が訪れています。中でも第三セクター温泉宿泊施設「湯遊ランドはなわ」には、漫画家富永一朗先生の原画50点が常設されるとともに、300種5,000株のダリア園が、訪れる人の心を癒してくれます。



風呂山公園から眺める市街地

■年50回を超える都市交流事業

埴町もご他聞に漏れず過疎の町です。昭和30年の町村合併時には17,000人だった人口が、年々減少の傾向をたどり、昨年は1万人を切ってしまいました。現在43ある行政区の半数近くが存続を危ぶまれている現状です。

町は少しでも過疎化からの脱却を図るため、交流人口の増加を図る取

組を行っています。中でも、平成3年から東京都練馬区、平成8年からは葛飾区と交流を開始、両区とも災害時における相互応援協定を結び、物産販売のほか温泉宿泊施設の保養所契約も行い、相互の交流を図っています。

今年3.11の大震災と原発事故時には、両区ともにいち早く駆けつけ、物資のご提供をいただきました。さらに、温泉地の観光客減少と風評被害を食い止めるため、埴町観光協議会の取り組み（はなわ応援プラン）にご賛同いただき、30を超える団体、500人以上が当町へ宿泊来町したほか、物産販売にも両区民を挙げて協力いただき、昨年の3倍以上50回もの風評被害キャンペーンを実施しています。

2. 協議会の活動開始の背景・経緯

■地域おこしの原点は「団結」

埴町ふるさと産業おこし連絡協議会は、平成元年に設立されました。行政・商工団体・農業団体・地域づくり・生産者団体が一つになり、17団体300人が会員となっています。幹事会は組織の代表12人で組織され、毎月数回の会議を行っています。事業内容はダリアの町づくりのほか、産業祭などのイベント、都市との交流事業、漫画グランプリなどで、地域の産品や人材を活用し、いかに地域を活性化させるかを協議し実行しています。



練馬・葛飾区を中心にした都市交流



ダリアは華やかで品種が豊富

■ダリアの華やかさを「埴町」のイメージ戦略として活用

ダリアは、もともとメキシコが原産地で、オランダ人によって日本に渡ってきました。品種は多く、世界には3万種ものダリアがあり、花形や花色の豊富さは驚くばかりです。

埴町とダリアのつながりは、平成9年に遡ります。観光・交流・健康を目的に町所有の温泉を活用し、平成10年オープン「湯遊ランドはなわ」の誘客を図ろうと、2,000㎡のダリア園をオープンし、後に7,000㎡に拡大しました。

ダリアを選定した理由は4つあります。一つ目は、埴町の町名「はなわ」にふさわしく、はな=花そして人の「わ・和・輪」で町おこしをしようとしたためです。二つ目は、ダリアは華やかで種類が豊富です。三つ目は花の期間が4ヶ月と長いこと。四つ目は、花、球根、芽、すべてに活用できるということです。

湯遊ランドはなわのダリア園には、現在300種5,000株のダリアが咲き誇り、訪れた人々の心を和ませています。

■福島県が主催する「うつくしま未来博」が飛躍のきっかけに

ダリアの町づくりの最初の取り組みは、3,000戸の世帯に球根を配布することでした。昔から庭先でダリアを咲かせていたという人も多くい

ましたが、殆どがポンポン系のもので、デコラ咲き、カクタス咲きなど、華やかなダリアを咲かせてもらうことから始めました。さらに写真コンテストや老人会へのダリア栽培講習会などの取り組みも併せて実施しました。しかし、町民にとってなじみの少ないダリアは、そう簡単に受け入れられるものでないのが現実です。

第1弾の壁にぶつかっているころ、新たな転機が訪れました。ダリアを取り組みはじめて3年目、埴町から車で一時間の距離にある須賀川市で、福島県が主催する「うつくしま未来博」が開かれることになりました。イベントのコンセプトは、「県民総参加」。県は、各自治体が主となるイベントや出展を募集し、当協議会は、「県民総参加」ならぬ「町民総参加」でダリア園を出展することに決めました。



平成13年開催うつくしま未来博に「はなわのダリア園」を出展

■町民の汗と想いが心一つに

ダリア園出展には、相当な覚悟が必要でした。と同時にいろいろな問題点が出てきました。片道1時間の道のりをどのような形態で人員輸送するか。どこの団体を主とするか。出展前の土作りをどうするかなど、問題は付きません。ましてダリアを美しく咲かせるためには、開催までの手入れも必要です。

協議会は、町おこしの一環としてなんとか協力してほしいと、町民に投げかけました。すると、町老人会が、婦人会が、商工団体が手を挙げ、主となるダリアづくり班と草取り班、運転班などを割り当てし、出展期間3ヶ月（7月から9月）に対し、手入れ期間4ヶ月という未知の取り組みがスタートしました。



東京都葛飾区でダリアづくり指導

■未来博町民参加で「優秀賞」受賞

はなわのダリア園出展は、会場を訪れる人々を楽しませただけでなく、多くのマスコミからも取り上げられ、町民の意識の中に、次第にダリアが根付き始めました。早朝から手入れ等に参加した各団体や個人は、延べ1,000人以上。「力を合わせて出展した」というみんなの汗と達成感で、町民の心は一つになりました。さらにその取り組みが評価され、未来博県民参加プログラム「優秀賞」を受賞。翌年には、秋田市・山形県川西町・東京都町田市、葛飾区のトップが参加し、埴町で「第1回ダリアサミット」が開催されました。

当協議会は、未来博出展準備と併せて、埴町内小中学校、老人会など22団体がダリアづくり名人を育成。町関係施設などに、自らの手でミニダリア園を作ってもらい、同時に「ダリアづくりコンテスト」を開催しています。ダリア名人は小学校児童にダリア栽培を伝授しています。お年寄りにとって子供たちとのダリア交流は唯一の楽しみで、自然な形で世代間交流が行われています。また、東京都葛飾区にダリア名人30人が訪問し、球根の植え方から栽培の仕方まで、3年間にわたり指導し交流を図っています。

■ダリアの特産品開発で「知事賞」受賞

はなわダリア染めの会は、公民館の染物講座の参加者が、町の特産品を作りたいという思いで結成。選りすぐりの花びらをアルコールや乾燥して保存し、一年中染め上げられるシステムをつくりました。平成14年度福島県特産品コンクールに出品し、みごと最高賞の「知事賞」を受賞しました。

ダリアの球根はアネッサという漬物グループが「さすけ根え」という漬物に加工しています。ダリアは毒という説がありましたが、某大学と日本ダリア会、さらには東京都練馬区の漬物会社の協力を得て、ワイン、味噌、粕漬けなど5種の漬物に加工し販売しています。

ダリア園開園の時期、福島県埴町ならではの「ダリア会席料理」を湯遊ランドはなわで楽しめます。花びらと新芽、球根を取り入れた料理が、観光客を楽しませてくれます。

さらに、平成22年からはなわのダリアを、本格的に東京市場に出荷。現在22人の生産者が切り花生産協議会をつくり、より品質の高いダリア生産に力を注いでいます。



「はなわのダリア」で商標登録

3. 課題と展望

福島県内では、ダリア＝（イコール）埴町という認識がされるようになりましたが、県外となると知名度が低く、これからさらなる取り組みが必要です。

持続性のある町づくりのためには、住民の人材育成とともに、地域全体の所得向上が不可欠となります。ダリアの町おこしのためには、湯遊ランドはなわを拠点とするダリア園を、観光としてアピールしていく一方、「はなわのダリア」の切り花生産を、他の産地に負けないようなプレミアのついた産地づくり形成を目指さなければなりません。首都圏に3時間という立地条件を活かしながら、若者の新規就農者を今後どれだけ伸ばしていくことができるかが、今後の大きな課題となってきます。

また、最終的な目標は、ダリアの町づくりだけではなく、「花の町はなわ」を掲げ全町公園化実現の取り組みです。はなわの町名が、名実ともに『はな＝埴 わ＝和・輪』に広がっていくことを目標にしています。